

市民連合@みやぎ 2022 参院選を振り返って

市民連合(中央)は「第 26 回参議院選挙に関する声明」(2022/7/11)の中で、「自由民主党が議席を増やしたのは 1 人区を含む選挙区に限られており、比例区ではむしろ 1 議席減らしている。逆に立憲民主党は、比例区では改選議席数を維持、議席減となったのは 1 人区を含む選挙区でのことであった」と指摘したうえで、「2016 年、2019 年と立憲野党が積み重ねてきた 32 の 1 人区すべてでの候補者の一本化が今回わずか 11 にとどまり、また、その 11 の選挙区でも選挙共闘体制の構築が不十分に終わった結果、勝利できたのは青森、長野、沖縄の 3 県だけに終わった。2016 年に 11 議席、2019 年に 10 議席を 1 人区で勝ち取ったことと比較して、野党共闘の不発が今回の選挙結果に結びついたことは明らかである。」と総括しました。

市民連合@みやぎは、この参院選総括に深く頷かざるを得ず、わが宮城選挙区もまた「選挙共闘体制の構築が不十分に終わった結果」敗北した(典型的な)1 人区のひとつであると認めるところから、この総括を提起します。

① 野党共闘成立の遅れ

- ・共闘(それ自体限定的なものでしたが...)の成立が 6 月 6 日(公示のわずか 16 日前)となり、公示前の運動がほとんど出来ませんでした。初めて国政選挙に挑む新人候補が、4 期 24 年務めた現職との圧倒的な知名度の差を、短期間で埋めることは困難でした。
- ・今の公選法では公示前にどれだけ運動できるかが鍵であり、公示直後の調査で相手方が「優勢」と出た結果を、短い選挙期間中にくつがえすことは至難となります。公示時点で少なくとも、「背中が見える」位置にはつけておく必要があります。
- ・とりわけ、昨年来、自党内の桜井 vs 石川の公認争いが大々的に報じられ、さながらメディアジャックの様相を呈し、事実上の事前運動となっていました。その間、我が方が出来ることは殆どありませんでした。

② 限定的にとどまった野党共闘

- ・野党間の政策合意は、市民連合@みやぎが仲介した「ブリッジ協定」となり、署名無しの「口頭確認」にとどまりました(このことが野党共闘の”本気度”を限定づけることとなりました)。
- ・協定式、キックオフ集会、街頭演説会等々で、候補者と立憲野党の代表が並び立つ場面はほとんどなく、県民有権者に「野党共闘候補」「野党統一候補」を印象付けることは出来ませんでした。
- ・限定的ではありましたが、市民連合@みやぎが事実上主催した 3 カ所の個人演説会(塩釜、富谷、若林)、7/7 ペDESTリアンデッキイベントが開催され、なんとか共闘の旗を立てることが出来ました。
- ・市民連合@みやぎとしては、独自チラシを 11 万 9000 枚印刷し、マンション群へのポスティング活動などで撒き切りました。しかし全体としては不完全燃焼に終わりました。

③ 「共闘効果」が発揮できなかった

- ・以上のように野党共闘が大きく立ち遅れ且つ限定的であったことが響き、小畑候補は「共闘効果」(共闘による野党基礎票からの上積み)を発揮することが出来ませんでした(河北新報記事「宮城の野党 基礎票逃す」参照)。
- ・政策(公約)、宣伝物、候補者の訴え等々において、桜井候補との明確な対立軸が打ち出されず、「今の政権・今の自民政治を変えたければ小畑候補へ」という二者択一の選択肢になり切れませんでした。

- ・換言すれば、強い現職に挑戦して新人候補が勝つための戦略戦術を持ち合わせず、桜井 vs 小畑、自公 vs 野党共闘という対決の構図を作ることが出来なかった、ということです。
- ・その結果、反自民票、現政権への批判票、政治に変化を求める票は、維新候補や小政党候補に分散することとなりました(「立候補者別得票数」表参照)。ロシアによるウクライナ侵略(それに乗じた「軍拡論」や「9条無力論」)が、それに拍車をかけました。

敗北によって照らし出された「市民と野党の共闘」の必要性と有効性

- ・今回の桜井候補の得票は、前回(2019年)、前々回(2016年)敗北した自民候補の票とほぼ同等(つまり自公の基礎票を手堅くまとめただけ)であり、そこから伸長したわけではありません。野党側の共闘が限定的なものに終わり「共闘効果」が生まれなかったが故に、勝利できたに過ぎません。
今回の参院選へ向けた自民党の唯一の戦略は「野党共闘の分断」でしたが、桜井氏を宮城の候補者にしたこともその戦略の一環であり、残念ながら、それが功を奏しました。
- ・逆説的に言えば、今回の参院選の手痛い敗北によって「市民と野党の共闘」の必要性と有効性がいっそう鮮明になった、とすることができます。昨年の衆院選以降、野党共闘バッシング＝「共闘したから負けた」というネガキャンが張られました。今回の参院選は「共闘が限定的だったから負けた」ことが、事実として明らかだからです(マスコミやネットの論調も、昨年の「共闘したから負けた」から今年は「共闘しなかったから負けた」に、完全に切り替わっています)。
”本気の共闘”をやらなければそもそも勝負にならない、選挙の土俵にさえ登れないということが、敗北によってハッキリしました。

9条改憲・大軍拡路線阻止、2023 地方選勝利、そして 2025 参院選へ！

- ・昨年来の野党共闘バッシング(ネガキャン)はまさしく敵方による「分断工作」だったのであり、我が方はそれに対抗する力を持ち得ず、今回の敗北を招きました。「政治を変える」「政権交代を成し遂げる」ために、「市民と野党の共闘」を立て直し、分断工作を跳ね返す力をつけなければならない。この基本的認識に立つことが出発点となります。
- ・憲法 9 条を変え大軍拡を目ざす勢力の議席が衆参両院で 3 分の 2 以上を占めることとなった今、私たちは立ち止まっているわけにはいきません。「9 条改憲 STOP！ 戦争 NO！」の国民的大運動を巻き起こさなければなりません。そして、その市民運動の力でもって、もう一度「野党は共闘！」のうねりを作り出しましょう！
- ・次に民意を示す機会として、2023 地方選が重要となります。とりわけ来秋の宮城県議選は、原発、水道、病院などの県政課題を抱える中、野党の議席を大きく伸ばさなければならない闘いです。宮城の「市民と野党の共闘」の力が、次に試される場となります。
- ・今回、野党共闘の大義を裏切った桜井充氏の再選を許したことは痛恨の極みです。私たちはこの悔しさを決して忘れず、6 年後の捲土重来を期します。
もちろんその前に、3 年後の参院選で必ず今回の借りを返します。私たちは、今から直ちに、わが野党共闘候補＝石垣のりこ議員の押し出しに取り組んでいきます。
- ・皆さん！「安保法制の廃止と立憲主義の回復、そして個人の尊厳を擁護する政治の実現」を目ざして、たゆまず諦めず、私たちの道とともに歩み続けましょう！

(2022/08/21)